

## 初期デュルケム、ソシオロジとゾチオロギの交差

——没後百年に——

近畿大学 山下雅之

デュルケムの博士論文では社会を概念的にどのように組み立てるかが示されている。その核心を成すのは有機的連帯の概念であるが、社会の分化が進み各部分が有機体の一部であるかのように相互依存関係を強めることをベースとしている。分業の生み出す経済的関係よりもデュルケムが強調するのは道徳的効果であり、これが新たなタイプの連帯を生じさせる。それに対比されるのがメンバーの類似性から生じる連帯すなわち機械的連帯であった。

“La solidarité qui dérive des ressemblances est à son maximum quand la conscience collective recouvre exactement notre conscience totale et coïncide de tous points avec elle : mais, à ce moment, notre individualité est nulle.” DTS p. 121

「社会的諸分子はそれぞれの固有の運動に従わない・・・これは無機物体の諸分子に見られるものと同様である。それゆえこの種の連帯を機械的と呼ぼう」(分業論、井伊訳上217頁を改)。

「分業が招来する連帯はこれとは全然趣を異にしている。・・・この連帯は高等動物において観察される連帯と似ている。このような類推から分業に由来する連帯を有機的連帯と呼ぼう」(同218～9頁)。

この二つの概念はデュルケムの頭の中に突然思い浮かんだのだろうか？われわれは、彼が80年代から慣れ親しんでいた、そして後に視察をおこなった当時のドイツの社会学を見てみよう。

「[人々の意志の間の]肯定的な関係によって形成される集団は、内および外に対して統一的に働く存在または物とみなされ、結合体 *Verbindung* と呼ばれる。この結合体には、実在的有機的な生命体と考えられるものと、観念的機械的な形成物と考えられるものがある・・・」(『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』、杉之原訳34頁)。

古代の血縁的で地縁的な社会と、近代の分化した機能的な社会のどちらが“有機的”なのか？機械的／有機的という対立する用語が逆転して用いられていることは偶然なのか、それとも・・・

デュルケム自身はこのように弁明している。

「著者と同じように私も社会には二つの大きな種類があると考えます。・・・著者と同じように私も、ゲマインシャフトが第1の事実であり、ゲゼルシャフトは派生した結果であると認める。最後に私は、著者がゲマインシャフトについておこなった分析と叙述を大筋において承認する。

・・・私は大規模な社会的集合体の生活も小規模な集合体のそれと同じく、自然なものであると考える。それはともに有機的であり、内面的であることに変わりない。われわれの近代社会にも純然たる個人的な運動のほかに・・・純粹に集合的活動が存在するのである」(『デュルケムドイツ論集』、小関・山下訳、53～54頁)。

分業論ではテンニースやジンメル以外に、アルベルト・シェフレ、アレクサンダー・フォン・オッティンゲン、カール・ビュッヒャー、人類学者のテオドル・ヴァイツやテオドル・ビショフなど多くのドイツ文献がごく普通に引用されている。ヴォージュに生まれ、おそらくはアルザス語を話し、敗戦でそのアルザスを失ったフランスに住む彼にとって、ドイツの科学が異国の学問でなかったことは想像に難くない。当時の(今もだが)社会学を国境で切り分けることはナンセンスではないだろうか。